セイラムのハムレット
—若きグッドマン・ブラウンのための幸福の処方箋—

中谷ひとみ*

１．セイラムのハムレット

William Shakespeare（1564-1616）作 *Hamlet*（1600-1602頃）の主人公ハムレットは、情念と理性のせめぎあいのなかで逡巡する。叔父に殺された父王の復讐をなすべきか、デンマーク王子として生まれた自分はどう生きるべきかと苦悶する。このままでいいのかという煩悶が表現される有名な独白—”To be or not to be, that is the question.”のなかに、個人として自らの生き方を問い、苦悩する近代人の普遍性が示唆されていると考えられてきた。自分とは何かを考え、時代の中で生き方を模索し決定し行動する必要があるようになった、デカルト（1596－1650）の時代と重なる、その初期あるいは直前といってよい時代の演劇作品である。

Nathaniel Hawthorne（1804-64）の文学にも、牧師の Hooper や Dimmesdale など逡巡する個人が多く登場する。短篇小説“Young Goodman Brown”（1835）の若き敬虔な農夫である主人公も、その一人である。結婚という人生の段階、そして性的イニシエーションを経て3か月後、妻（Faith:信仰という象徴的な意味を体現する）を家に残し、「森」に足を踏み入れて以降、生活も人間も一変する。後の人生はいかなる精神的拠り所もなく、一人で思い悩む。森へ行く決心をしたのは、このまま夫婦生活を続けること、幸福（だと信じているに違いない今）の日常をこのまま享受し続けることに疑問を持ったのだろう。性的イニシエーション後のさらなる通過儀礼の段階に来ていたのだ。青年は、幸福な結婚生活をこのまま続けてよいのか—“To be or not to be *happy*”—と迷ったのだろう。そして、この日の夜こそ森へ行ってそれを確認しなければならないと思ったのではないか。行くことで「契約（“covenant”）」（Baym et al eds. 1200）[1]を守り、神の救いという恵みを得られると信じたのだろう。しかし、そこで目撃するのは黒ミサのような光景であり、信仰心厚く、善良そのものと思っていた共同体の人々である。堕落した放蕩者、いかがわしい評判の女、犯罪の容疑がかけられている者たちに交じって、尊敬してきた教会の長老たち、総督の夫人をはじめとする評判の高い貴婦人たち、来ているのが母親に見つかりはしないかと戦々恐々たる妙齢の美女たち、そして自分の妻まで入門儀礼の儀式—悪魔からの聖体拝領の秘儀—に参加している。かくして、彼は無垢の表層の下に罪深い思いや欲望、特に悪しき情欲が渦巻いていることを知る。例外はない。「悪こそ人類の本性、悪こそ汝たちの唯一の幸福」（1206）という悪魔の言葉

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授
[1] ホーソーン研究には Centenary Edition を使用することが多かろうが、重大な差異はないため、本論ではこのテキストを使う。

を聞き、森から共同体に戻った主人公は、以後猜疑心に苛まれ、鬱屈した日々を送ることになる。それまでのナイーヴな意識や生活や幸福感には想像もつかなかった森での情景を目撃し、この言葉の洗礼を受け、奈落の淵に突き落とされ、そこから這い上がれなかった。

短篇小説という制約があるとしても、この虚構（フィクション）は詳細な人物構築（characterization）の描写をもとに、出来事や人間関係や行動などを通して主人公の内的成長や人物自体あるいは社会をリアリスティックに描くものではない。因果関係については十分な説明が提示されているとは言えず、また象徴的な言説もあって、様々な解釈がされてきた。例えば、なぜ今宵森へ行かねばならないのか、なぜ妻がそれを思いとどまるよう懇願するのか、彼女自身も森へ行くことに迷っている―森に魅惑されている―ようだが、なぜか、「孤独な女は自分でも怖くなるような夢や思いに悩ませられる」（1199）という彼女の発言はどういう意味なのか、森ではなぜ老女が奇跡的な速さで歩くことができ、なぜ夜露に濡れていた枝が主人公の旅の伴侶の指が触った瞬間枯れしぼみ、まるで一週間も陽光にさらされていたかのように干上がるのかなど、どのように解釈すればよいのか。枚挙にいとまがない。単に幻想的な虚構であるとか、何らかのアレゴリーであるとか、主人公の一夜の夢を描写しているなどと解釈しても、不十分であろう。むしろ、不条理にもある状況に突然放り込まれ、なすすべもなくたたずむ主人公を描く「状況小説」と言ってよかろう。それまでの言説・思考の枠組みが崩壊させられる状況に落とされるのである。この点では、イギリス文学とアメリカ文学の差異を小説（ノヴェル） vs. ロマンスという言説で論じてきた文学史解釈を再考する議論が役に立つ。成田は、現実の背後に真実を見たホーソーンが小説で描く「奇妙さ」について説明しながら、「ロマンス」と「状況」の概念の脱構築を試みる：

> …小説（ノヴェル）の描写が基盤とする日常の世界を規定する既成の関係性、我々が人間や事物を判断する時の指標となる、人間と人間の、あるいは人間と物の、社会的関係性をはぎ取られた存在であるがゆえに「奇妙」なのではないだろうか。だが、そののっぺりとした鵺（ぬえ）のような不気味な相貌こそが実は現実というものなのではないか。それを映すのがホーソーンのロマンスなのだ。こう考えてみると、ロマンスというのは、我々の日常を規定する因習的な関係性の消失に基盤を置いているものなのではないか。あるいは、こう言ってもよい。それは、因習的言語によって結びつけられ構成された人間や事物の世界、そういった既定の言語体系を解体し、そこに浮かび上がった異相の世界を言語によってあらたな関係性の下に組み直す文学である、と。解体される「既定の言語体系」とは、もちろん、アメリカやイギリスといった具体的社会の現実に他ならない。（10－11）

「若きグッドマン・ブラウン」は、主人公ブラウン青年が共同体の人々との親密な関係性や信頼関係と平穏な日常を突然はぎとられ、新たな意識と関係性の中で実存を模索しなければならない物語―状況小説/ロマンス―であり、「個人の存立の危うさ、解体されていく自己イメージはまた極めて現代的にアピールするテーマ」（成田 22-23）でもある。

小説の舞台は17世紀 New England、魔女狩り時代の Salem である。この頃の歴史的背景としては、1692年の Salem Witch Trials での25人殺害、17世紀後半以降のピューリタンたちのクエーカー教徒に対する不寛容、1675-6年の King Philip's War (Indians vs. colonists; Puritanたちの足固め) がある。これらがこの小説の中核にあるわけではないが、宗教色濃い時代の、ある共同体が舞台である。この時代は高揚期を迎える西漸運動や産業革命を背景とする時代でもあった。また、この短篇が書かれた1830年代後半から40年代にかけては、超絶主義運動が盛んで、文学に教訓を求める風潮もあった。(酒本 123その他参考) ホーソーン文学の特異性である「『暗さ』」(139) に魅了され、彼を敬愛し続けた同時代の作家 Herman Melville (1819－91) は、ホーソーン宛の手紙で「『あなたを知ったことは、われわれに不滅のいのちのあることを、聖書以上にわたしに納得させてくれます』」(138) とまで書いている。アダムとイヴ以来の人間の堕落のアレゴリー、原罪、悪や人間存在の闇への素朴な若者の開眼を、ホーソーンは新たな作法、ロマンス/状況小説というかたちで描いていると考えられる。

我らがセイラムのハムレットは、このような時代背景のもと、共同体の中で孤立し煩悶するが、彼が近代的自我の持ち主だったか、中世から近代への過渡期あるいは近代への入口に立ちつくす無力な個人だったのかについては、厳密な考察が必要であろう。「近代」の定義そのものは困難ではあるが、いくつかからこの短篇小説を検討してみよう。敬虔な農夫であるブラウン青年には「近代」の定義の一つである「国民国家」というような意識は希薄であるし、小説には軍隊と同様に近代のシステムには不可欠である「学校というイデオロギー装置」への言及もなく、「＜教会―家族＞から＜学校―家族＞へ」(桜井 50) という変化の示唆も見出せない。D.Christianによれば、「近代は膨大な統計データを生み出している唯一の時代である。しかも大規模な変化の多くについて定量化できる唯一の時代でもある。」その結果、「近代の主要な特徴とトレンド」(渡辺　訳 158) として「急速な人口増加/技術革新/生産力の大幅な増加/化石燃料その他のエネルギーの利用/大きな共同体/官僚政治/愛国心/平均寿命の向上/女性の役割拡大/商業主義/世界的なネットワーク/狩猟採集生活と農耕生活の崩壊」(159) が挙げられる。この理論からは、ブラウン青年が生きたのは、厳密には近代というよりはそれ以前の社会と考えねばならないだろう。Zygmunt Bauman はさらに『リキッド・モダニティ』で、近代を、「固体的 (ソリッド) 」な近代と、「まるで流体 (リキッド) のように、あらゆる制度、システムが固定した形をもちえなくなる」近代に二分して考察している。バウマンと同様、Anthony Giddens (1938-) やUlrich Beck (1944-2015) も「科学技術の発達、グローバル化、リスク化、個人化、流体化といった近代の原理原則が貫徹している結果」、「近代社会が構造転換し」、「さまざまな社会的問題が生じている」と考えている。「職業や家族が不安定となり、規範やアイデンティティや愛情も確固としたものではなくなっている」というのである。(高橋・開内　訳、山田昌弘　解説 268) このように、現代の我々はより広い視野で世界史を眺め、近代を議論できるが、封建時代の終焉―より具体的には、16世紀にかけ

てのルネサンスおよび宗教改革に至る―までの中世は、神の下での普遍性が担保されていた時代であったことに大きな異論はなかろう。絶対的権威である神のもと、社会はキリスト教の善悪二元論で代表されるような言説で構築され、人々の個人としての実存など問題にならないし、現実社会や生活に大きな疑念を抱くこともなかったであろう。しかし近代になると、社会の変化とともに個人の意思やアイデンティティや生き方がクローズアップされるようになり、ブラウン青年も近代という新しい時代に向かう苦悩を経験することになると言ってよい。

もう一つ別の定義を参考にしてみよう。西欧近代社会のためのより有用な定義が「社会契約論的思考」と「ホッブズ問題」である。佐藤は考察する：

> 西欧近代社会とは何だろうか。
>
> 定義はさまざまあるが、その決定的な特徴の一つが社会契約論的思考にあることは、誰もが認めるところだろう。自由な個人があつまって、契約によって社会をつくりだす。社会契約の論理は契約以前の個人の存在を前提とするから、個人主義も当然その系としてふくまれる。
>
> この社会契約論が近代の表の顔だとすれば、その裏の顔はいうまでもなくホッブス問題である。…ホッブス問題の定義にもさまざまなものがありうるが、ここではごく簡単に、「自由な個人の間にいかにして社会秩序をつくりうるか」という問題だとしておこう。（134）

この定義から、この短篇小説が旧世界の「敷居」―主人公が家の敷居を超えて森に向かうことを何度も躊躇うことを思い出す―を越えて近代へ向かうブラウン青年の実存的生(life)と認識の物語であることがより明確になる。これまで当然と考えてきた共同体/社会と人間への疑念の闇に落とされ、何らかの新しい社会契約の論理とともに、自由な個人として共同体の中で生活し続ける道を模索しなければならないのである。

小説は作者が生きた個人主義の勃興期である19世紀の精神を反映してもいる。森のなかで善悪や正邪の二元論が崩壊し、誰もが持つ情欲や欲望の闇を目の当たりにして、主人公は機能不全に陥る（immobilized）。近代に入りつつあった時代に彼が直面しなければならない人間存在の闇、自己イメージの喪失と再構築の必要性、他者に対する信頼、人類に対する絶望は普遍的テーマであり、現代の読者にもアピールするのである。このような時代と状況にあって、このまま幸福な日常を享受してよいのか迷い、この日の夜こそ森でその答えを見つけようとした主人公は、それまでのように「幸福」であり続けることができるのだろうか。幸福を維持するにはどのような処方箋が必要であろうか。

２．鬱々たる日々―21世紀における幸福のための処方箋

２－１．ブラウン青年は「うつ病」だったのか

鬱々たる日々を過ごすブラウン青年は「うつ病」だったのかと訝るのは自然かもしれない。この疑問には否と答えることによって、さらに「うつ状態」ということも部分的に否定することによっ

て、小説の特異性や戦略に焦点を当てて論じることから始めよう。医学的には「うつ病」は精神障害/疾病であり、「今日では、DSM-IV-TRに準拠した診断学が用いられ、『うつ病』といえば大うつ病性障害（単一エピソードあるいは反復性）か、双極性障害（I型,II型）」（加藤　他編 94）である。一方、「うつ状態」は以下のように定義づけられている：

> うつ状態は、抑うつ状態と同義で、疾病論的用語ではなく、状態像を示す用語で…一般に精神運動活動が抑えられている状態を指すと考えてよい。具体的には、感情面では抑うつ気分、悲哀感、不安感などとして、精神運動面では思考・行動の抑制、焦燥を伴う興奮などとして、身体面では、各所の、あるいは全身的な不調として現れうる。
>
> （加藤　他編 93）

生き方の姿勢に関しては問題があるとはいえ、共同体で大きな軋轢などはなく、子孫とともに「幸福」に見える家庭生活を続けたブラウン青年は、うつ病ではなかろう。しかし森から帰って以降、上記引用のうつ状態については、抑制された精神運動活動のいくつかがみられる。会衆が聖歌を歌うのを聞くとじっと聞いてはいられない（「焦燥」）。司祭の熱弁を聞くと顔面蒼白になり、「興奮」して体が震えだす。欺瞞を知っているからである。「抑うつ気分」はほとんど日常的にみられるであろう。また、厳しいが同時に悲しそうな目で妻を見たりする。しかし、彼女を睨みつけるなどは「悲哀感」というよりは怒りや恐れも混じった複雑な感情であろうし、「不安感」というよりは何もできない自分に対するもどかしさや怒り、人間や世界に対する漠然としたやり場のない憤りを日常的に感じていたのだろう。身体面での不調はそれほど認められないようだ。主人公には「行動の抑制」などいくつかのうつ病的傾向はあっても、「思考」の抑制はあまりなく、むしろ過度に、そして無意味に考えすぎて行動に移せない―再びimmobilized―と考えるべきだ。うつ病ではないこと、そしてうつ状態とも簡単には診断・明言できないことが、文学であることの証明ともなろう。文学作品は単なる病気の症例の記述ではない。

現代人のうつ病を論じる野村は「進化論的に考えてみた仮説」であるとことわりながらも、「ゆううつになるのは一つの能力であり、人間の持つ強み」であると述べる。つまり、「人類全体が生きのびるためにゆううつが役に立ち続けている」のだ。（203）。「『行動の停止』『争いを避ける』『援助を引き出す』という機能」（205）があり、これらのおかげで人は生き延びられるからである。このように、ブラウン青年のうつ的傾向は、彼の生存と自己・アイデンティティを失わないための生得的能力の発揮とも考えられる。もちろん文学であるから、それだけではない。また、「『遺伝子に根ざす重みづけ機能不全』から派生した『こだわり』の特質に、さらに社会的な役割性が加わることにより、[現代のうつ病者の性格が]二次的に形成される面が大きい」（215）とすれば、うつ病やうつ状態・うつ的傾向から脱するヒントが得られる。社会状況が異なるのであるから現代人の場合とは異なるにしても、ブラウン青年は「重みづけができず自己決定能力」（216）に欠けると確かに言える。人生において「重みづけ」ができ、どんな事態にあっても何らかの決断

を下し行動できれば、生（life）を回復できるし、そうなればまた成長したと言える。「重みづけと自己決定能力」は回復への、そして近代人として生きる一つの道を示唆している。しかし、近代直前あるいはそのとば口に立った青年の苦悶を描出するこの文学テキストのなかでは、主人公は回復からも安寧からも幸福からも、締め出されることになる。

幸福を考えるとき、「幸福とは何か、いかにして幸福になるか、そして、なぜ幸福になるべきか」（青山 232）という問いが可能である。この質問に答えるためには、各々の問いを考察する際の様々な要素を相互に関連づけながら立体的に考える必要があるだろうが、幸福になるための方法というよりは幸福に通じる道は、我々現代人にはいくつもある。万人に当てはまる唯一絶対の方法はないにしても、精神医学的方法以外でも現代の様々な知見が教えてくれる。ブラウン青年にとっても、幸福の処方箋のヒントとなろう。いくつか挙げてみる。

２－２（ａ）

Jean-Jacques Rousseau（1712-78）は「孤独な散歩者の夢想」で、「とうとう私はこの世で一人ぽっちとなってしまった。…すべてのものから離れてしまった私とは、いったい何ものなのだろう？このことだけが、私に残された唯一の探求すべき問題である」と語り始め、次のように続ける：「黙想なさい。孤独を求めなさい。…哲理を考えるにはなによりも自省することが必要です。…一人でいても退屈しないことを学びなさい。人は孤独に生きると、ますます人間がすきになるものです。」（太田　訳 120）ルソーは孤独であること、黙想し自省することを推奨する。それを通して自分への、そして人間への理解が深まり、肯定的な人間観を持つこともできる。ただし、気の長い話であり、孤独や黙想に耐えられない人もいるだろう。

２－２（ｂ）

Carl Gustav Jung（1875-1961）の方法は、どんなことがあろうと、どんな結果になろうと、それでも神を信じ、神に頼ることである。人間の悪は本性的なものゆえ根絶はできない。「集合的罪悪」すなわち「影」を受容し、それと共に生きねばならない。悪を愛と知恵の精神―善―で飼いならすことは困難だが、「神」の助力を期待できる。

> 今や事は人間次第である。つまり、極大の破壊力が彼の手に与えられているのであり、問題は、彼がこれを用いようとする意志に抵抗し、その意思を愛と知恵の精神で飼い馴らすことができるかどうかである。自分の力だけでは彼にはほとんどそれは不可能であろう。そのためには彼は、天にいる「弁護者」、まさに神の許へ取り去られた男の子[『ヨハネの黙示録』12章5節]を必要とする。この者が、それまでは断片的であった人間の「癒やし」と全体化をもたらすのである。（Jung *GW* 11 §745;宮下 34）

神への全幅の信頼の可能性と希望であるが、ここで想起するのは聖書「ローマ人への手紙」（第５

章2－5）である：

わたしたちは、さらに彼［主イエス・キリスト］により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。

楽観主義的ではあるが、患難、絶望、迷いなどを体験しても、神の計らいに信を置けば立ち直れる。神の愛（アガペー）、恩寵、あわれみや慈しみはかくも深いと信じれば救われるのである。自分で事態を打開できなければ、他者に頼ればよい。最終的には、神を信じて神と共に歩んでゆけばよいのだ。不信や疑念の底なし沼にはまってはならない。罪、悪、死、信仰、愛、癒し、寛容、正義、地獄、自殺、職業の11章を立てながらキリスト教を論じる近藤は、彼が「キリスト教信仰の秘密が隠されているように…思う」（82）マーガレット・パワーズの詩「あしあと」を引用する：

ある夜、わたしは夢を見た。
わたしは、主とともに、なぎさを歩いていた。
暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。
どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。
一つはわたしのあしあと、もう一つは主のあしあとであった。
これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、
わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。
そこには一つのあしあとしかなかった。
わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。
このことがいつもわたしの心を乱していたので、
わたしはその悩みについて主にお尋ねした。
「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、
あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、
わたしと語り合ってくださると約束されました。
それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、
ひとりのあしあとしかなかったのです。
いちばんあなたを必要としたときに、
あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、
わたしにはわかりません。」
主は、ささやかれた。
「わたしの大切な子よ。

わたしは、あなたを愛している。
あなたを決して捨てたりはしない。
ましてや、苦しみや試みの時に。
あしあとがひとつだったとき、
わたしはあなたを背負って歩いていた。」（82-83）

神は我々が気付かずとも常に共に歩いてくださる。苦難や悲しみや試練を共に生きてくださるとすれば、一人より心強い。古代キリスト教神学者であるアウグスティヌスの『告白』の昔から、いや、さらに昔から「超越的な霊的存在である神は、親しく呼びかければ応えてくれる」（出村58）。神は語りかける相手であり、共に歩んでくださる。そう信じるか信じないか、それが問題なのである。

２－２（ｃ）

生きる「意味」が分かれば難局も受容して生きられる。ナチスの強制収容所に収容された経験を持つ精神科医 Viktor Emil Frankl（1905-97）は、幸福を求めることがむしろ問題であると考え、『夜と霧』で、生きる「意味」を発見するためには、自分のために生きることから他者のために生きることへの発想の転換が必要であると教える：

ここで必要なのは生命の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。そのことをわれわれは学ばねばならず、また絶望している人間に教えなければならないのである。哲学的に誇張して言えば、ここではコペルニクス的転回が問題なのであると云えよう。すなわちわれわれが人生の意味を問うのではなくて、われわれ自身が問われた者として体験されるのである。…人生というのは結局、人生の意味の問題に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果すこと、日々の務めを行うことに対する責任を担うことに他ならないのである。（霜山　訳 183）

まさに、発想の転換が求められる。強制収容所で彼らを支えたもの、彼らの「苦悩や犠牲や死に意味を与えることができるものは『幸福』ではなかった」（204）のである。

２－２（ｄ）

東洋思想の禅やマインドフルネスも役に立つだろう。前者では心を閉じれば逆説的に開いていき、全き心の自由を得ることができる。具体的な禅の修行方法などはすでに西欧でも知られているし、日常生活に取り入れている西欧人も多い。後者の実践の目的は「こころ豊かな生活」―「いまここに生きている、という実感を持つ生活」であり、「生きている瞬間の『質』を高めること…自分だけではなく家族、友人、そして間接的につながっている人々の『こころの動き』に関心を持つ

こと」が重要であると教える。（松尾 4）具体的な実践方法としては、まず呼吸に集中することから始め瞑想するが、干しブドウを使った「食べ物メディテーション」や、「歩くメディテーション」などもある。（94－98参考）

以上のように、様々な幸福のための処方箋が考えられる。しかし、処方箋には問題があるものもあるから注意しなければならない。例を挙げよう。人間にとって社会生活は不可避であるから、社会や共同体や家庭内での人間関係は最重要要素の一つであることは否定できない。しかし、人とのつながりという点では、SNSやLINEで常につながっているポストモダンの現代は、常に開いているが閉じている奇妙な関係性の時代であり、人間どうしのつながりや幸福感という点で問題が多い。（河合　他 208-11参考）　表層的でなく真の意味でつながっているのか、胡散臭い。また、メールに即座に返答しなければ仲間から排除される恐れに戦々恐々しているとすれば、そのようなつながり方が本当に幸福だと言えるのか、疑問である。実り多い人間関係が本当に結べるのだろうか。

悪の存在を前にしても、なお陰鬱あるいは人間嫌いにならない方法が、20そして21世紀の我々にはある。しかし、これらは歴史の後知恵にすぎない。ブラウン青年はひたすら苦悩するだけだ。彼はユングが言うように、それでも神を信じて頼って生きていくこともできたであろう。またフランクルが教えるように、人間の本性を理解したうえで、唯我論的に自分のことばかり意識せずに、共同体の他者が求める事を考えて行動すれば、人生にイエスと言うことも、生を愛おしむこともできたであろう。主人公の妻フェイスが夫を見送る時「お帰りになった時、願わくはすべてが平安でありますように」（1199）と言ったが、共同体の人々は人間の本性を理解したうえで、それを受け入れて社会生活を続けているのかもしれない。主人公自身の意識/性格に問題の本質があるのかもしれないのだ。彼が幸福ではなかったことに異論はなかろうが、島井によれば、幸福な人たちは総じて「自己が確立し安定して」（44）おり、自分と人を比べたとしても、「比較した情報をしっかりと受け取っており、それを適切に処理している」、つまり「ポジティヴに解釈し、それを広く生かす」ことができる。一般的に、事態について「柔軟に判断し、価値観や意見を調整していく」（島井 31）ことができ、したがってストレスも少ない：

> …ストレスへの対処理論という観点からみれば、幸福な人の特徴としては、楽観的な見通しをもっていること、ネガティブな出来事の中に柔軟にポジティヴな側面を見つけることができること、ユーモアやスピリチュアリティを用いること、自己反省や反復思考をしないことがあげられるだろう。（47）

ブラウン青年の幸福のための処方箋は、彼自身による内なる変革と外部からの働きかけの両方からの可能性が考えられるのである。

３．幸せは不幸せ、不幸せは幸せ

主人公が身体的にも精神的にも硬直化してしまった理由をテキストに即して確認し、その原因と対策を具体的にまとめてみよう。森での聖体拝領の儀式をつかさどる暗い人影が「我が子らよ、皆はこの若さにて、皆の性（さが）、皆の運命を発見したのです」（1206）と言い、人間の邪悪を暴露する。幼少の頃より崇めてきた聖者たちや汚点一つないと信じていた共同体の人々の秘密・本当の姿が露呈する。教会の長老たちが小間使いの処女たちに向かって淫らな言葉を吐く。邪魔な夫を毒殺などして、妻は後の人生を思うままに生きる。若者が遺産欲しさに父を殺害する。美しき乙女が自分の生んだ幼児を殺す。こうして結婚3か月にして、青年主人公は歓楽の罪や特によこしまな情欲の罪を暴露される。ストーリーは身近な内容で、性にまつわる問題という点で一貫性がある。しかも、それらの罪を皆が互いにかぎ分けることができるようだ。そして、このことを知ることは限りない歓びであり、今こそ、欺瞞の夢から覚め、「悪こそが人類の本性であること、悪こそが人類の幸福であること」（1206）を知るべきだと言われる。主人公は敬虔な家系の生まれで、信仰心の篤い人々のなかで育ち、自分が善悪の二元論の善側にいると信じて疑わなかった。それまでの二元論的言説の異なる極が真実であるといわれても、信じることができない。「上には摂理の天があり、下には信仰（faith）がある限り、自分は断固として悪魔に抵抗してみせる」（1203）と自らに対して強く叫んだ時と同じく、二元論言説に囚われたままであり、容易に変われない。二元論言説の縛りはかくも強い。夢であれ現実の出来事であれ、この一夜の出来事の後、主人公の人格も生活も、それまでとは一変する。少し長いが本文から引用する：

> A stern, a sad, a darkly meditative, a distrustful, if not a desperate man, did he become, from the night of that fearful dream. On the Sabbath-day, when the congregation were singing a holy psalm, he could not listen, because an anthem of sin rushed loudly upon his ear, and drowned all the blessed strain. When the minister spoke from the pulpit, with power and fervid eloquence, and, with his hand on the open bible, of the sacred truths of our religion, and of saint-like lives and triumphant deaths, and of future bliss or misery unutterable, then did goodman Brown turn pale, dreading, lest the roof should thunder down upon the gray blasphemer and his hearers. Often, awakening suddenly at midnight, he shrank from the bosom of Faith, and at morning or eventide, when the family knelt down at prayer, he scowled, and muttered to himself, and gazed sternly at his wife, and turned away. And when he had lived long, and was borne to his grave, a hoary corpse, followed by Faith, an aged woman, and children and grand-children, a goodly procession, besides neighbors, not a few, they carved no hopeful verse upon his tombstone; for his dying hour was gloom. (Baym 1207)

現代の読者は、我々自身の心の闇や邪悪さなどについては多くの文学作品などの示唆もあって、ある程度認識しているし、それを乗り越える可能な方策もいくつか知っている。人間理解のための様々な知見もあり、真実を受容することも、その上で表面的には平穏で「幸福」な生活を送ることもできる。妥協ではない。成長である。しかし、それらを持たない我らが主人公は絶望的状況に放り込まれる。罪や悪の洗礼を受け、人間・人類の心の闇を知ってからは本当に「幸福」にはなれなかった。「厳めしい、悲しい、暗い想いにとらわれ、不信の塊のような人間と化し」（1207）、共同体の人々の善意に対しては常にその背後に別の意図を疑い、物事の否定的側面ばかりを見、妻の愛を信じきらない。すべてを受容して生きることができなかったからである。その理由をまとめよう。

（1）「悪こそが人類の本性、悪こそが人類の幸福」と悪魔に断言されて、善悪二元論と人類の本性、そして幸福にまつわる命題の罠に嵌ってしまった。また、二元論言説の二極構造の対極・衝撃的な言説を示されて身動きが取れなくなった。悪魔の二元論から超脱できず、排除された中間（excluded middle）や現実の重層性や人間の真実の複雑性について、思いが至らない。

（2）”My Kinsman Major Molineux”（1832） で主人公の若者に寄り添っていた紳士のような存在、生き方指南が、不在である。

（3）そして、それ以前の問題として、新たに共同体の他者との関係を構築しようとせず、彼らに疑念を抱き、拒絶する彼自身に、最も大きな問題がある。これまでとは異なる自分の identity と生き方の構築ができない頑なさと柔軟性のなさである。この意味では「エゴティズム」が、主人公が幸福になれない原因の一つと考えられ、「この『病い』を治癒する道は、自分の内面を秘密の領域として聖別することをやめ、他人とのつながりを回復することだ」と作者ホーソーン自身も考えている。

> ホーソーンが「エゴティズム、あるいは胸の蛇」のなかで説明しているところによると、自分の内面に「慢性的な病い」をかかえている人間は、その苦痛のゆえに自己を鋭く意識せずにはいられず、例外なくエゴティスト〔自己中心主義者〕になる。ひたすら自分ばかりを凝視しつづけているために、自分を他人とのつながりのなかで考えることができず、日常的な意識の平衡を失い自分を不当に拡大して考えることになる。（酒本 92）

岸見も、幸福になる道として、「ありのままの自分を受け入れる」「不完全である勇気」「対人関係に入っていく勇気」「貢献感」などを挙げている。（145-90参考）ありのままの自分を受け入れ、不完全であることに耐え忍びながらも行動を通して、共同体のなかでの自分の居場所と貢献感により満足を得ることが幸福への一つの道であるのだ。

（4）ハムレットのように言語を通じて自分の行動や未来を内省することをせず、良きにつけ悪しきにつけ日常言語で他者との新しい関係性を構築することを積極的に試みようともしない。そして、森で悪と罪の洗礼を受けた時、妻の姿を認めて「絶望の果てに気も狂わんばかりになって、大声で長いこと笑って」（1204）辛うじて自己を維持したような笑いも、今はない。言葉少なで不機

嫌な日常である。（3）とも関連するが、この点ではこの物語を主人公の性格喜劇と考えることもできる。森での体験を境に悲しい、「自暴自棄ではないにしても、厳しく悲しみに満ちた陰気なもの思いにふける、疑い深い人間」になり、人生も「陰鬱な臨終」（1207）を迎えて終わる。しかし西谷が指摘するように、妻とは夫婦生活を続け、何人もの子供や孫に囲まれ「見方によっては喜劇」であり、「メルヴィルとはまた味わいの異なる、ホーソーン流の登場人物に対する冷ややかなデタッチメントと家庭小説の理想に対する揶揄が読み取れる。」（74）不信と懐疑の悪しき循環に嵌り、何らの新しい発想や考えも、積極的な行動もなく人生を終わった男の悲喜劇である。

（5）孤独でいられる能力に欠ける。Anthony Storrによれば、「独りでいられる能力は…自己発見と自己実現に結びついていき、自分の最も深いところにある要求や感情、衝動の自覚と結びついていく。」（44）この能力により、「感情の深淵に触れることができ、喪失体験と折り合うこと、考えを整理すること、物の見方を変えることができる。」（105）

> 孤独になる能力は貴重な資質であり、学習、思索、改革、変化への順応、そして内なる想像の世界との接触の維持を促進する…。親密な関係をつくる能力が損なわれてしまった人の内部においても、創造的想像力の発達が治癒の機能を果たすことができることが分かった。（306）

孤独は可能性を秘めている。しかし、ブラウン青年は孤独にありながらも、それを生きる力に転じる能力が不足していたのだ。

しかし、「幸せ」は「不幸」であり、「不幸」は「幸せ」であるとも言える。不幸は救いでもあるのだ。なぜなら、「幸福は、盲目であること、怠惰であること、狭量であること、傲慢であることによって成立している」からである。（中島 54）「幸福とは、思考の停止であり、視野の切り捨てであり、感受性の麻痺である。つまり、大いなる錯覚である。」（114）中島は有名な幸福論の著者である Alain さえも否定する：

> 他人を幸福にすることを義務と信じている人は、おうおうにして―アランのように―マジョリティの感受性をそこにもってきて平然としている。すべての人の欲望・感受性・趣味嗜好・信念は一致するという何の根拠もない想定のうえにあぐらをかいて、他人を幸福にすることの果てしない難しさを直視しようとしない。（111）

極端な物言いではあるが、逆説的に、正鵠を射た指摘である。漫然と幸福であると思うのではなく、「自分がいつでも不幸であることを自覚する」ことが、つまり真実を直視する勇気を持つことが重要なのである。「醜いこと、理不尽なこと、偶然的なこと、不可解なことに蓋（ふた）をしたり、無理に納得しようとしたりせずに、そのままそれらを承認すること」（176）が必要なのだ。共同体の人々が漫然と妥協しながら生活しているとすれば、幸福であっても不幸であるし、ブラウン青年は不幸ではあっても幸福なのである。ブラウン青年は現代のわれわれとは異なり、不幸であるからこそ幸福であることは知る由もなかろう。ただ近代の入り口で立ちすくむのみだ。

４．文学という処方箋、文学の戦略

最後に、「幸せは不幸せ、不幸せは幸せ」という逆説的真理と希望を表現するために、この小説がどんな戦略を採ったかに言及したい。

第一に、わかりやすい明確なストーリー性である。身近な性のイニシエーションを経てほどなく、特に情欲に関する邪まな、暗き本能に駆り立てられる人間の本性が焦点化される。暗い情欲の炎から、悪の存在、人類の悪と人間の心の闇というように、物語は展開する。

第二に、文学的技法である。ブラウン青年の無意識の旅とも解釈できる、森への旅の目的は何なのか。なぜ今夜なのか。妻が「一年のうちでも今夜だけはいかないで」と夫に懇願するのはなぜか。「一人ぼっちの女はいろいろな夢やいろいろな思いに悩まされて、自分が自分で怖くなることがある」（1199）と言う彼女は、何をどこまで知っているのだろうか。このような物語理解の鍵となるようなことがらに関する明確な説明や示唆がこの小説にはない。因果応報が不明確な、幻想的で夢のような状況で物語が進展する。そこでは次の2点を特徴とする言説が用いられる。

（1）象徴的人物の登場をはじめとする、象徴主義的手法：

例：蛇の形をした杖を持つ50歳ぐらいで主人公が自分と同じ農民のようだと思う男性が、悪魔の世界を支える役回りを担う重要な象徴的人物として登場する。

例：不安、絶望、虚無、理性とは対極の非合理性を示唆する森と闇という背景を使う。

例：色の効果を利用し、絵画的で直接的な印象を可能にする。例えば、主人公は共同体の人々の善行を見ても疑い、顔が蒼白に（pale）なり、子供たちを守ろうと必死になる。死んで屍は白髪（hoary）、死んだ時刻は闇の時（黒）である。

（2）幻想的で、夢と同じような領域である超自然的な“dark fantasy”とも言える手法で物語が語られる。その表現例は枚挙にいとまがない：

例：goody Cloyseは老女にしては驚くべき速さで、森をすいすいと飛ぶように歩いていく。

例：蛇の形をした杖を持つ老人は主人公の父とも祖父とも親しかったというが、年齢が不可解/不明確である。

例：蛇形の杖を持った旅の伴侶（悪魔の象徴）の指に触れられると、夜露に濡れた楓の枝が枯れしぼみ、まるで一週間も陽光にあたっていたかのように干上がってしまう。

例：松明の先端はメラメラ燃えているのに、棒は全く焦げていない。

例：森の悪魔の聖体拝領の秘儀で妻 Faith を見つけてから絶望の果て、気も狂わんばかりになって叫び、笑う鬼と化したブラウン青年は、杖を取り再び歩き始めるが、驚くべき速さである。また、悪魔崇拝者たちと一緒になってからは、目には人間らしからぬ赤い炎がメラメラ燃えている。

なぜこのような dark fantasy とでもいえる文体をホーソーンは使ったのだろうか。Ursula K. Le Guinによれば、ファンタジーは「有益な物語」を使って「現実をリメイク」（160）するからで

あり、写実的な手法よりも効果的に、「象徴を用いて、直接的には言えないことを表現し、イメージを用いて、直接的には知覚されないものを表現」（161）するからである。

物語は人間的な真実を語り、人間のコミュニティと霊的な渇望に奉仕します。そして、想像力にもっともよく働きかける物語は、心の深いレベルで、理性の下で作用します（だから、合理主義者には理解できないのです）。そういう物語は、詩と同じように象徴を用いて、直接的には言えないことを表現し、イメージを用いて、直接的には知覚されないものを表現します―遠回しなやり方を用いて、真実の存在する方向を示すのです。（160-61）

明るいファンタジーであれ暗いファンタジーであれ、一見遠回しのようだが、ファンタジーは直接、読者の感性に訴えかけ、頭で論理的に理解するというよりはからだ全体で感得させると言ってよかろう。しかしそれは常に理性によって「合理化される危険―説明を加えられ、寓意に格下げされ、メッセージとして読まれる危険」にさらされる。とはいっても、「最強のファンタジーは…いとも簡単に解釈をはねのけ」（161）る。

セイラムのハムレット、ブラウン青年の不幸/幸福物語は状況小説―換言すれば、幻想、夢物語あるいはdark fantasy―として読者に体験される最強のファンタジーの一つである。近代のとばロに立つ彼は善悪の二元論から脱することも、人間性の真実を受け容れてしなやかに、かつしたたかに生きることもできない。ぎこちない生き方しかできず、我々現代人の目からは精神的に成長しているとは到底思えない。しかしこのような生き方しか、近代直前では望めないのであろう。各々の時代において文学作品の読者は、主人公が経験する暗澹たる闇のなかで彼とともに生き、彼の人生と彼が幸福になるすべを考え、そして自分たち自身の生き方と幸せについてイメージを膨らませる。こうして文学作品は独自の戦略を駆使して、読者を揺さぶり、変えていくのである。

本論は日本英文学会中国四国支部第70回大会での口頭発表「セイラムのハムレット―若きグッドマン・ブラウンのための幸福の処方箋」（2017. 10.28、於・就実大学）を再考し、加筆したものである。

引証・参考文献

青山拓央。『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』。東京：太田出版、2016。

加藤敏　他編。『現代精神医学事典』。東京：弘文堂、2016。

河合俊雄　他。『＜こころ＞はどこから来て、どこへ行くのか』。東京：岩波書店、2016。

河原理子。『フランクル「夜と霧」への旅』。東京：平凡社、2012。

岸見一郎。『幸福の哲学―アドラー×古代ギリシアの智恵』。東京：講談社、2017。

Gilbert, Daniel. *Stumbling on Happiness.* New York: Vintage, 2006.

Christian, David. *This Fleeting World: A Short History of Humanity.* 渡辺政隆　訳。『ビッ

グヒストリー入門―科学の力で読み解く世界史』。東京：WAVE 出版、2015。
合田正人。『幸福の文法―幸福論の系譜、わからないものの思想史』。東京：河出書房新社、2013。
近藤剛。『キリスト教思想断想』。京都：ナカニシヤ出版、2013。
酒本雅之。『ホーソーン―陰画世界への旅』。東京：冬樹社、1977。
桜井哲夫。『「近代」の意味―制度としての学校・工場』。東京：日本放送出版協会、1984。
佐藤俊樹。『近代・組織・資本主義―日本と西欧における近代の地平』。京都：ミネルヴァ書房、1993。
島井哲志。『幸福(しあわせ)の構造―持続する幸福感と幸せな社会づくり』。東京：有斐閣、2015。
新宮秀夫。『幸福ということ―エネルギー社会工学の視点から』。東京：日本放送出版協会、1998。
Storr, Anthony. *Solitude*. 吉野要　監修、三上晋之助　訳。『孤独―自己への回帰』。東京：創元社、1999。
出村和彦。『アウグスティヌス―「心」の哲学者』。東京：岩波書店、2017。
中島義道。『不幸論』。東京：PHP研究所、2015。
成田雅彦。「ホーソーンとロマンスの遺産―『若いグッドマン・ブラウン』に見る現実(リアル)の風景」。成田雅彦・西谷拓哉・高尾直知　編。『ホーソーンの文学的遺産―ロマンスと歴史の変貌』。東京：開文社、2016。3-25。
西谷拓哉。「メルヴィル『林檎材のテーブル』における家庭小説の実験―ジャンルとの親和と軋轢」。成田雅彦・西谷拓哉・高尾直知　編。『ホーソーンの文学的遺産―ロマンスと歴史の変貌』。東京：開文社、2016。51-76。
野村総一郎。『新版　うつ病をなおす』。東京：講談社、2017。
Bauman, Zygmunt. *The Art of Life*. 高橋良輔・開内文乃　訳。『幸福論―“生きづらい”時代の社会学』。東京：作品社、2009。
Frankl, Viktor Emil. 霜山徳爾　訳。『夜と霧』。東京：みすず書房、1961。
---. *Ärztliche Seelsorge: Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse.* 山田邦男　監訳。『人間とは何か―実存的精神療法』。東京：春秋社、2011。
Baym, Nina et al eds. *The Norton Anthology of American Literature* Fourth Edition Vol.1. New York: Norton, 1994.
松尾正信。『マインドフルネス：沈黙の科学と技法』。東京：近代科学社、2017。
宮下聡子。「道徳教育への宗教的情操教育の貢献可能性―ユング、フランクルの宗教的倫理を手がかりに」。『道徳と教育』334（2016）：29-40。
諸富祥彦。『フランクル心理学入門―どんな時も人生には意味がある』。東京：コスモス・ライブ

ラリー、1997。

山田邦男　編。『フランクルを学ぶ人のために』。京都：世界思想社、2002。

Jung, C. G.. *C. G. Jung Gesammelte Werke in 20 Bänden.* Walter-Verlag, 1952.

Le Guin, Ursula K. *Cheek by Jowl.* 谷垣暁美　訳。『いまファンタジーにできること』。東京：河出書房新社、2011。

Rousseau, Jean-Jacques. 太田不二　訳。「孤独な散歩者の夢想」。『世界教養全集25』。東京：平凡社、1961。

Rachels, James and Stuart. *Problems from Philosophy.* 古牧徳生・次田憲和　訳。『哲学のアポリア―批判的に思考する』。京都：晃洋書房、2015。